

---

 私がなぜ現在の科目を選んだか
 

---

## 「呼吸器・感染症・アレルギー内科」

信州大学医学部内科学第一教室  
小坂 充

なぜ現在の科を選んだか、私の中でこれは聞かれて困る質問の代表格です。進路に悩む研修医からこの質問を受けたときは、本心とは裏腹の立派なことを言ってみたり、何となくなどと適当にごまかしたりしてきました。一言で説明しようと思うと真実から遠ざかり、言葉を並び立てれば焦点が合わなくなるのです。掘り下げれば、なぜ医者になろうと思ったか、も同様なのです。

例えば、サッカーが好き、カレーが好き、などは「理由などない」と言えるような直感的、本能的なものです。私の場合、呼吸器内科に入ろうと思ったことについて直感的な要素は2〜3割でしょうか。残りの大半はおそらく理性的な考えによるのだと思います。それをこのコラムで簡潔に書き上げる必要があるのですが、先日から書いては消し、書いては消しの繰り返し

---

 私がなぜ現在の科目を選んだか
 

---

## 「糖尿病・内分泌代謝内科」

信州大学医学部内科学第四教室  
島田 恭輔

「明るい人を明るいままに」

学生時代は部活に明け暮れ、実習を始めたなら各科の魅力に気づき自分の適性があるのだろう、と漫然と過ごしていました。回る科ごとに魅力に溢れ、ますます決められなくなる一方で、なんとなく内科系かな？と漠然とした気持ちは持っていました。さて、出身大学でもある信州大学で初期研修を始めることになり、最初にローテートする所は興味のあるところと言われました。選択科がはっきりと絞れていなかった私にとっては、これまた選択に迷うわけでしたが、学生時代の縦割りクラスの縁もあって、第四内科から研修スタートさせていただきました。学生時代のイメージとしては、内分泌はちょっと難しい、糖尿病は患者さんがクセがありながらも明るくていいな、と感じていま

して一向にまとまる気配がありません。参考にといい、同じテーマで本誌に掲載された他の先生方のコラムも拝読しましたが、私にはこのような明確な意思、きっかけ、理由がないと気落ちするばかりでした。おそらく、私の場合はたくさんのピースを組み合わせて完成した絵が呼吸器内科であったということで、その絵を代表するような特別な1枚のピースはないのだと思います。

では、呼吸器内科医として10年経った今、この選択をどう思うのかと問われれば、間違いなく自分にとって良い選択であったと言えます。高齢化社会にあって、肺炎、肺癌は死因の多くを占める疾患です。従って、患者さんが当科を受診した際、私たちは最期までお付き合いする覚悟で診療にあたるケースが多くなります。患者さんにはそれぞれ違った背景があり、考え方も様々です。これまでどう生きてきたのか、これからどう生きるのか、ときに涙を浮かべ、ときに笑顔を見せ、語ってくれるその人生訓が、確実に私自身の生き方に大きな影響を与えています。医師として、そして人間として成長できる場がここにはあると思います。

(信大平18年卒)

した。上記の言葉はそんな日常会話に対して（飲み会の場ではありますが）上級医が私にかけてくれた言葉です。糖尿病は細小血管合併症を始め種々の合併症をもたらし、病に苦しむ方も少なくなくいるのが現状です。糖尿病患者さんの自由気ままな明るさを人生の最後まで保ちたい、私もそう考えるようになっていきました。

「心より出で一願わくば再び一心に至らんことを」

さて、私は学生時代オーケストラに所属していました。好きな作曲家でもあるベートーヴェンの晩年の曲「荘厳ミサ曲」の冒頭にこのような言葉が書かれており、大切にしている言葉です。宗教に学のない私にとって本当の意味することはわかりませんが、人との関わりにも通ずる言葉だと考えています。患者さんの思い・心を私が汲み取れますように、そして、私の思いが願わくば患者さんにも届きますように。

日々の診療の中で、難渋することも多々ありますが、患者さんに向き合い、心を通い合わせるのがより重要な科であると感じ、私はこの科を選択いたしました。

(信大平28年卒)